大学生におけるジェンダー認識の変容過程

ー本学『ジェンダー論』講義の学習効果からー

Effects of Learning about "Gender Studies"
On College Students

湯川　隆子*
Takako Yukawa

問題

（1）近年のジェンダー認知における動向

今日、ジェンダーに関するバイアスや差別意識は徐々にではあるが、低減される方向にあるといわれる。しかし、ジェンダーに関する規範や慣習、通念は長く人々の中に半ば無意識裡に保有されてきたというわが国の歴史的・文化的背景の故に、その意識変革にはなお多くの地道な教育的努力が必要とされる。このことは、本学の学生についても例外ではない。

ちなみに、人の意識を変えるには百年かかるともいわれる。ジェンダーについてはどうか。内閣府をはじめとした官民の意識調査や社会統計などの種々の資料によれば、近年、特に1980年代以降、人々の男女に関わる価値規範や通念に対する意識は、緩やかではあるが、伝統的な規範に沿った性別意識から、性にとらわれない平等主義的な意識へと変化しつつあるといわれる（井上・江原, 1991, 1999）。主に大学生を中心とした心理学関係の諸データにおいても、男性的特性・女性的特性などに代表されるジェンダー特性についての認知が、やはり両性間を区別して捉えない方向に変容しているとする結果が提示されている（東・鈴木, 1991；湯川・廣岡, 2003など）。

だが、現実の社会をあらためて眺めると、ジェンダー規範は巧妙に生き残り、さまざまな場面や状況において、依然としてその力を失っていないようにみえる。日常生活におけるさまざまな場面で、人々が発する何気ない言葉や無意識的な振る舞いに、ジェンダー規範の影が色濃く残っているのを見て取ることができる。

現実の生活場面でみられる既存のジェンダー規範への受容的な認知と、心理学などの諸調査における反受容的な認知との乖離・ギャップは何を意味しているのか。一つの解釈は、ジェン

平成17年9月2日受理　*社会学部人間関係学科教授

ダー認知の個人差、即ち、ジェンダー認知における革新度、進歩度に個人差があるという説明である。つまり、今の日本社会では、革新的なジェンダー観をもつ人と既存のジェンダー観を温存する人の両方が存在しているということである。今ひとつは、ひとりの個人の中にジェンダー認知における二重基準が内在しているという解釈である。本音と建て前の使い分け、個人的発言と公的発言の使い分け、問題の重大性や切迫度による使い分け、相手による使い分けなど、遭遇した場面や状況に応じてひとりの人間が革新的な認知と保守的な認知を使い分けているのではないかということである。

諸調査に認められるジェンダー認知に関する世代差や年齢による違い、経済格差や社会的地位による違い、職業や身分による違いなどは前者に該当するケースである。学生、特に大学生が革新的なジェンダー認知を示しやすいという傾向はこの事実を例証するものであろう。一方、個々人の中に潜んでいるジェンダーに対する二重基準もさまざまなケースにみることができる。公の場で男女差別的な発言をする人は昨今まずいないが、私的な場とされる家庭に戻った途端、豹変する人は跡を絶たない。ドメスティック・バイオレンス（DV）は、極端な二重基準をもっている人の反社会的行為だといってよい。カップル間でよく起こる恋愛時代から結婚生活時代への推移に伴って生じるお互いの言動のすれ違いやギャップは、ジェンダー認知の二重構造を反映していることが多い。現今のジェンダー規範に対する認知はいまだ錯綜した状況にあり、伝統的な認知を脱却しているとはいいがたい。

（2）ジェンダー・センシティビティを磨く必要性

個人間、あるいは個人内にみられるジェンダー認知のギャップは何に因るものだろう。さまざまな要因や条件が想定されるが、ここで取り上げたいのは、ジェンダーに対する感受性（gender sensitivity）の問題である。ジェンダー・バイアスや差別の核心は、公の場面での人々の言動にではなく、人々が自身で気づいていない何気ないことばや振る舞いのなかにあるといえる。さまざまな法律や規範が浸透することとは、それらが人々の意識の中に深く取り込まれ、種々の言動が半ば自動的に生起するようになることである。ジェンダー・センシティビティとは、人々が現実に生き、生活している場面で遭遇するさまざまな現象や問題に対して、半ば自動化された認知的枠組みに従って漫然と見過ごしたり、常識や先入見で片付けてしまい、そこにはたらいているジェンダー・バイアスや差別意識を見落としていることに、自分自身で気づく眼をもつことである。言い換えると、日常生活に埋め込まれていて、見えにくくなっている種々の無意識的なジェンダー・バイアスや差別をあらためて自覚し、意識化することだといえる。『この現象の中にジェンダー差別が潜んでいないか』、『個人的な問題としてみられているが、実は社会的な問題ではないのか』、『病理とされている病や障害は本当にそうなのか』、『自分が何気なくやり過ごしている事柄や日常の中にジェンダー差別の核心が在るのではないか』といった問いや疑問を常にもつことから始まる。

問題を意識できた次には、その問題がこれまで社会ではどのように理解され、説明されてきたのかを疑い、吟味する眼をもつことである。『人々の期待や素朴な信念が説明や言説の前提

になってはいないか。』『真実が常識や先入見に覆い隠されてはいないか。』『別の解釈は成り立たないのか、ジェンダー差別の視点からはどのように把握できるのか。』これらの問いを常に抱き、その答えを探し続けることが肝要である。自分でも気づかなかった自身の常識や先入見を一度疑ってみること、それらに惑わされず、別の新たな眼から問題を捉え直す努力が必要とされる。

人々のジェンダー差別意識を解消するには、まずジェンダーに関わる問題や現象に対する鋭敏な感受性を養うこと、そのためには、意図的な働きかけや具体的な配慮・処遇が不可欠である。このような教育的意図は、種々のジェンダー・フリー（フレキシブル）な教育の基本的要件の一つであることはいうまでもない。

（3）ジェンダー・フリー（フレキシブル）な発達・教育実践プログラムの開発

筆者はかねてより「生涯発達の視点からみたジェンダーの発達機制とその教育実践研究」に取り組んできた。以来、ジェンダー・センシティビティをまず第一に養うことを目的とした「ジェンダー・フリー（フレキシブル）な発達・教育実践プログラム」を開発する試みを、現実の大学における授業実践において検討することを企図してきたが、今回これを実現できる機会を得た。具体的には、筆者が本学で担当することとなった講義『ジェンダー論』の場において、授業効果の検討を試みることである。

本学『ジェンダー論』の講義目標は、ジェンダーに関する基本的知識を、われわれの身近な生活環境や社会制度、歴史的背景から把握し、それについての解釈や考察を試みることを通して、個々人、ひいては人間におけるジェンダーのもつ意味やその影響についての内省と洞察を得ることにある。より具体的には、個々の学生が、自分が日々の生活の中で何気なく発していることばや振る舞い、絶え間なく行っている判断や選択などを顧みることから、自分の中に半ば無意識的に培われてきたジェンダー・バイアスに気づく感受性をもてること、その感受性に基づいて、ジェンダーの問題に主体的に取り組み、自身の価値変革に向けての動機づけをもてることを狙っている。

このような目的で開講されている本講義は、筆者の企図している「ジェンダー・フリーあるいはジェンダー・フレキシブルな発達・教育実践プログラム」を開発し、実践する機会として最適の場であるといえる。そして、この試みはとりもなおさず、筆者が自身の担当講義を通して常に学生に期待していること、即ち、学生自身の主体的・自発的な自己変容・変革を促すという教育目標を果たすことと重なり合うものである。

（4）ジェンダー認知の測定方法の問題

ジェンダー・センシティブな眼を養うことを第一に企図した教育プログラムの開発に当たって、ジェンダーに関する人々の認知を的確に把握するための測定の問題は最重要課題の一つである。筆者はこの問題について、近年、ジェンダー認知を測定するために開発されてきた種々の測定具の代表的なものとして「ベムの両性性尺度（BSRI）」と「平等主義的性役割態度尺度

(SESRA-S)」「脱男性役割態度尺度（SARLM)」を取り上げ、それらについて、理論的・方法論的な視点から吟味を行った（湯川・石田, 2005)。本研究では、既論考を受け継いで、授業前後のジェンダー認知の変化を具体的に表す指標としてBSRIとSESRA-S、SARLM、及び「自己の性及び性別社会規範に対する受容性」を用いる。以下に、本研究で使用する各測度の概要を簡潔に説明しておく。

1）『両性性尺度（Bem Sex Role Inventory : BSRI)』

「両性性尺度（BSRI)」は、フェミニズムからの点検作業を精力的に行っていたBemによって1970年代後半から80年代にかけて開発されたものである。Bemは、自己のジェンダーの発達理論を展開する中で、「両性（具有）性」という概念とともにBSRI（両性性尺度）を作成した（Bem, S.L., 1974, 1975, 1981, 1985)。「両性（具有）性」とは、従来男女に振り分けられてきた諸特性、つまり「男らしさを表す性格特性」と「女らしさを表す性格特性」とを、男女の別なく両方を併せもち、状況に応じてこれらを使いこなせることが望ましい発達であるとする概念である。この概念に基づいてBSRI（両性性尺度）という尺度が開発されたのである。具体的には、男性的特性、女性的特性を表す性格特性それぞれ20項目を用意し、その両方について、調査対象者に7段階のどれかで自己評定を求める形式の尺度である。評定結果は、男性的特性、女性的特性それぞれについて得点化し、男性性得点、女性性得点の差から、4つのタイプを導き出すようになっている。つまり、男性性得点が女性性得点よりも大きい者は「男性性保有者」、女性性得点が男性性得点よりも高い者は「女性性保有者」、男性性得点と女性性得点がともに高く、差がないものが「両性性保有者」、男性性得点と女性性得点がともに低く、差がないものが「両貧性保有者」と分類される。両性性保有者が最も望ましいパーソナリティ特性をもつ者として位置づけられている。（なお、4タイプの分類基準について、平均値を使用するt値法と中央値を採用する方法のどちらが有効かについては、t値法を採用するものが比較的多いが、現在も議論が続いている。)

Bemの提唱以来、現在に至るまで、この「両性性」の概念の妥当性を巡って、種々の検証作業が数種の日本語版により持続的に行われている（Katsurada, E., & Sugihara,Y. 1999; Sugihara, Y., & Katsurada, E. 1999, 2000；下仲ら, 1990, 1991)

2）『平等主義的性役割態度尺度（The Scale of the Egalitarian Sex Role Attitude ：SESRA)』

「平等主義的性役割態度尺度」は、ウーマン・リブやフェミニズムの思想に基づいて、フェミニズム意識の水準を測る目的で開発されたものである。フェミニズム意識とは、「男女は平等であると認識し、社会的に存在する個人としての女性の自己実現および社会的地位の向上をめざす意識」である。具体的には、鈴木の『平等主義的性役割態度尺度（SESRA)』では、結婚・男女観（男女の関係と役割分担に対する態度)、教育観（子供をもつこと、育児および子供の教育への態度)、職業観（女性の就労に対する態度)、社会観（社会における平等主義的な価値についての態度）の4つの領域カテゴリーから構成される計40の質問項目各々について5

段階で自己評定するようになっている。わが国では鈴木のものが尺度としてのわかりやすさ、使用の便利さからよく利用されている（短縮版SESRA-Sでは20項目）（鈴木,1987, 1994b)。この尺度においては、得点の高いほうがより平等主義的態度を有していると解釈される。なお、同じ原理に基づいて男性役割についての評価を問う「脱男性役割態度尺度（SARLM)」も開発されている(鈴木, 1994a)

3）自己の性及び性別社会規範の受容性についての自由記述

上記２つのジェンダー測定尺度に対して、自由記述による質問法は、近年におけるジェンダー研究の進展から示唆された知見に基づいて考案された測定方法の一つである。ジェンダーについての社会規範と個人の認知との関係を問うとき、現在最も根底的と考えられる鍵要因の一つとして、「自己の性同一性・性自認」の概念が提唱されている。「自己の性同一性・性自認」とは、個々人が自己の性（性別）を自身でどう捉えているかという認識であり、自己のジェンダー観を形成する上での基底的要因と考えられているものである。具体的にいえば、自己の性（性別）を肯定的に認知しているか、否定的に捉えているか、自己の性（性別）を宿命的なものと捉えているか、変更可能なものと捉えているか、さらには、性（性別）というものが社会的にどのような意味を持ち、どう扱われているかについて自分はどう判断しているか、性（性別）は自分の人生の中でどのような位置と重みをもっているか、自分の中での他の諸特性や諸能力などとどのように関係づけているか、など自己の性（性別）に関わる基本的な認知的枠組みをさすものである(湯川・石田, 2004, 2005)。この見解に則り、本研究では、次の３つの質問に対する自由記述による回答を求め、自己の性及び性別社会規範を受容しているか否かを判断する。

【質問】:『男（女）としてのあなたの人生はどうでしたか。思っていることを自由に書いて下さい。』

(a)「男（女）でよかったと思いますか。その理由も書いて下さい。」

(b)「男（女)」でなければよかったのにと思いますか。その理由も書いて下さい。」

(c)「今度生まれ変わるとしたら、男（女）に生まれたいと思いますか。その理由も書いて下さい。」

ちなみに、上記３つのジェンダー認知を測定する測度について、既報（湯川・石田, 2005）においては、典型的な量的尺度である「BSRI」あるいは「SESRA-S 及び SARLM」と、自由記述形式である「自己の性及び性別社会規範の受容性」についての有効性を論じたが、その中で、「自己の性及び性別社会規範の受容性」における認識が、最もジェンダー認知の中核的な位置を示す測度になりうることを示唆した。

目的

本研究の目的は、上述した問題に従って、本学学生を対象とした授業実践を行うことである。

具体的には、筆者担当の『ジェンダー論』講義の受講者を対象に、授業効果、即ち、授業前と授業後において学生にジェンダーに対する認知的変化が生起した否かを検討することである。

方法

上記目的を遂行するための具体的な研究計画として、「プリ・テスト―ポスト・テストパラダイム」を採用し、以下のようなシークエンスで実施した。

【プリ・テスト―ポスト・テストパラダイム】

（1）プリ・テスト：初回講義時にオリエンテーションの一部として、全受講生のジェンダー
（講義開始時）　規範やジェンダー・バイアスについての意識や認知をみる以下の3種の調査を行った。①、②はジェンダー認知測定の代表的な2つの尺度である。③は自己の性及び現存の性別社会規範に対して肯定、受容しているか、懐疑的、否定的に捉えているかを尋ねる自由記述形式の質問である。

↓　①下仲ら(1990, 1991)による「両性性尺度(日本版BSRI)」
②鈴木(1994a, b)による「平等主義的性役割態度尺度(SESRA-S及びSARLM)」
③湯川ら(2004, 2005)による「自己の性及び性別社会規範の受容性」に関する質問票

Table1　「ジェンダー論」講義内容　(2004年度)

第1回目	オリエンテーション& Pre･Test
第2回目	ジェンダー概念の説明（ジェンダーとセックスの違い、ジェンダー規範、ジェンダー・ステレオタイプ、性別化）
第3回目	結婚・離婚制度の説明（婚姻届け・離婚届・出生届）
第4回目	家族制度、別姓問題（戸籍制度）
第5回目	学校教育制度におけるジェンダー問題（名簿、男子校・女子校、男女別クラス編成、教師の性別）
第6回目	学校教育における潜在的カリキュラム（教科・学校活動・進路指導における性別処遇）
第7回目	知的達成志向における男女差（成功恐怖動機）
第8回目	学業成績に及ぼすジェンダー規範の影響（知的能力の性差、教科の得意・不得意）
第9回目	就労におけるジェンダー問題（M字型曲線、男女間の賃金格差、男女雇用機会均等法）
第10回目	専業主婦、性別役割分業、主婦論争
第11回目	セクシュアル・ハラスメント
第12回目	セクシュアリティと性同一性障害（性的指向性と生物学的性）
第13回目	セックス（生物学的性）の特質（性の発生機構、間性）
第14回目	まとめ（性の多様性）& Post･Test
第15回目	前期試験

（2）授業実践：2004年度開講科目「ジェンダー論」のシラバスに沿って行った、講義の具体的内容はTable1のとおりである。

↓

（3）ポスト・テスト（講義終了時）：授業効果を見るべく再度、講義の終了時に全受講生に対して、プリ・テストと同一調査を行った。

①下仲ら(1990,1991)による「両性性尺度（日本版BSRI）」

②鈴木(1994a, b)による「平等主義的性役割態度尺度（SESRA-S及びSARLM）」

③湯川ら(2004, 2005)による「自己の性及び性別社会規範の受容性」に関する質問票

↓

（4）面接調査：成績評価完了後（講義終了6ヶ月後）に、受講生の中から任意に選んだ学生に面接調査を依頼し、自発的快諾を得た学生を対象に、かれらのジェンダー認識の内容について、その詳細を聞き取るもの。

【調査対象者】私立4年生大学（本学）在籍者（1～4年）で、2004年度・全学共通教育講義科目『ジェンダー論』受講者総数約280名の内、プリ・テスト、ポスト・テスト共に参加した学生183名（男子108名, 女子75名）。

【面接調査参加者】本調査対象者の内の22名。実際に面接に参加した学生は22名であったが、今回の分析では、プリ・テスト、ポスト・テスト共に回答した20名（男子9名、女子11名）を分析対象とした。

【調査時期・場所】・全学共通教育講義科目『ジェンダー論』講義室において筆者の教示の下、集団で実施した。所要時間は約20分であった。

・プリ・テストの実施：2004年4月はじめ

・ポスト・テストの実施：2004年7月末

・面接調査：2005年1月～2月。個別に筆者の研究室にて面談を行った。所要時間は1時間程度であった。

結果

結果の分析は2つの観点から行う。1つは、調査対象者の講義前後（プリ・テストからポスト・テスト）のジェンダー認知の変化を、①②③の3つの測度それぞれについて、尺度得点及び自由記述内容の変化から分析するものである。2つ目は、質問③の「自己の性及び性別社会規範の受容性の有無」を判断基準として、「性及び性別規範の肯定・受容群」と「性及び性別規範の懐疑・否定群」に分け、2群間における「日本版BSRI」と「SESRA-S及びSARLM」における認知変化の差を分析するものである。2つめの観点から分析を行う目的は、既報（湯川・石田, 2005）において示唆した「自己の性及び性別社会規範の受容性の有無」が、ジェンダー認知の中核的要因と

して位置づけうるという仮説を本研究においても検討する試みからである。

結果の整理は、「日本版BSRI」、「SESRA-S及びSARLM」については、それぞれ準拠した先行研究の得点化方法に拠った。まず、②の「SESRA-S及びSARLM」については鈴木（1994a, 1994b）に従って、各尺度それぞれについて、調査対象者毎に単純加算方式で尺度得点を算出した。①の「日本版BSRI」については、下仲他（1990, 1991）に則って、受講者毎に「男性性」得点、「女性性」得点の2つを算出し、対象者全体の「男性性」得点、「女性性」得点の各々の中央値に基づいて、全対象者を「男性性m」「女性性f」「両性性mf」「両貧性u」の4型に分類した。③の自由記述については、まず各（a）（b）（c）について、「自己の性及び性別規範を肯定し、受容している記述」、「懐疑的・否定的な記述」、「どちらでもないという記述」、「判定不能」の4つに分類した。次に記述（a）（b）（c）の中で、調査対象者の記述内容を最も明確に表現しているとみられた「記述（b）」の回答を代表して取り上げ、「自己の性及び性別規範を受容・肯定している記述」、「性別規範に懐疑的、否定的な記述、及びそれに拘泥しない記述」、「その他」の3つに再分類した。分類作業に際しては、筆者と心理学者1名が別個に判定後、それらを照合し、協議した。判定困難な回答はほとんどなく一致率は約95%であった。

Ⅰ．講義前後における全受講生のジェンダー認知の変化

（1）本受講者の全体的な傾向

まず、プリ・テストの結果から受講者183名の「日本版BSRI」と「SESRA-S及びSARLM」における全体的な傾向を概観する。

1）「日本版BSRI」における4タイプの人数

Figure1にみられるように、「日本版BSRI」による4型の人数は相半ばしており、人数に関して有意な差は認められない（χ^2）。強いていえば、「両性性mf」と「両貧性u」が「男性性m」

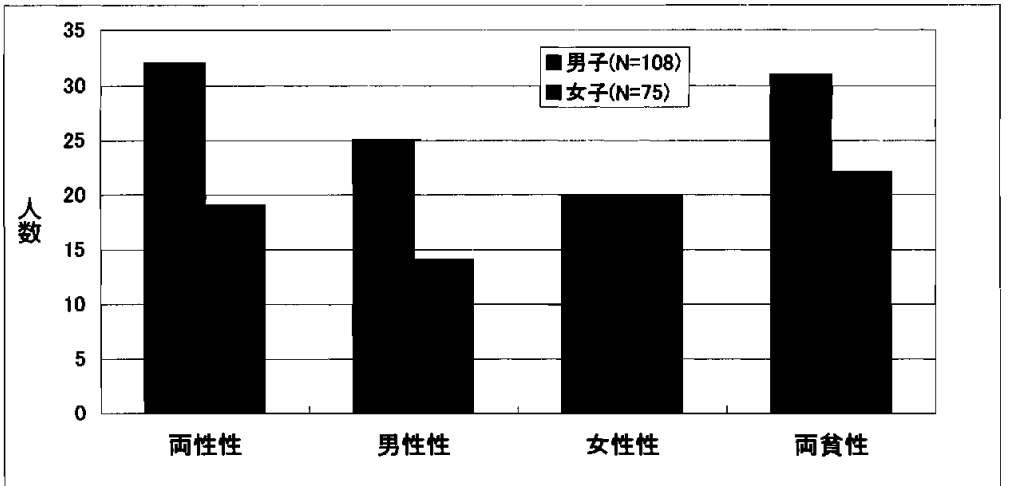

Figure1　Pre・testにおけるBSRIの4タイプの人数

Table2－1　大学生におけるBSRIの４タイプの内訳人数－類似研究との比較 －

( )%

研究者（年）	対象者	人数	mf	m	f	u
Sugiharaら（2000）	男子	531	33.0	18.0	19.0	30.0
	女子	696	31.0	20.0	19.0	30.0
鶴田・高橋ら（2003）	女子	1375	26.8	17.3	18.1	26.8
湯川ら（2004）	男子	57	31.6	21.1	21.1	26.3
	女子	37	16.2	29.7	32.4	21.6
湯川ら（2005）	男子	108	29.6	23.1	18.5	28.7
	女子	75	25.3	18.7	26.7	29.3

Table2－2　大学生におけるBSRIの４タイプ：平均とSD－類似研究との比較－

研究者（年）	対象者	人数	Masculinity		Femininity	
			Mean	(SD)	Mean	(SD)
Sugiharaら（2000）	男子	531	3.89	0.98	4.33	0.95
	女子	696	3.64	0.95	4.33	0.95
鶴田・高橋ら（2003）	女子	1375	4.21	0.85	4.64	0.76
湯川ら（2004）	男子	57	3.81	18.00	4.13	14.96
	女子	37	3.46	13.08	4.25	12.57
湯川ら（2005）	男子	108	3.72	16.75	4.31	15.19
	女子	75	3.60	17.52	4.42	12.16

「女性性f」よりも若干多い。「BSRI」については、Bemの提唱以来、現在に至るまで種々の検証作業が内外で数多くなされているが、大学生を対象に近年行われた調査結果（Sugihara,Y., & Katsurada, E. 2000；鶴田・高橋ら, 2003；湯川・石田, 2004）と比較対照したものをTable 2-1, Table 2-2 に示す。本データは、これまでに実施されている類同の諸研究結果と類似しており、わが国の他の大学生らとほぼ同様の傾向を有しているといえる。

2）「SESRA-S及びSARLM」

「SESRA-S及び SARLM」についても多くの追試データがあるが、湯川・石田が本学学生に2004年に実施したデータ（湯川・石田, 2004）と比較対照したところ、結果はほぼ類似した傾向を示している（Table3, Table4）。なお、「SESRA-S及びSARLM」いずれにおいても性差が認められている。即ち、「SESRA-S」では１%以下で（F=16.241, df(1,181)）、「SARLM」においても１%以下で（F=15.404, df(1,181)）有意な性差がみられ、女子が男子より平等主義的傾向が高いという結果になっている。この結果は、湯川・石田（2004）でも同様であった。

Table 3　SESRA-Sにおける類似研究との比較

SESRA-S	湯川・石田（2005）		湯川・石田（2004）	
	男子（N=108）	女子（N=75）	男子（N=57）	女子（N=37）
Mean	72.65	78.76	72.67	80.19
SD	10.54	9.40	10.64	9.18

Table4　SARLMにおける類似研究との比較

SARLM	湯川・石田（2005）		湯川・石田（2004）	
	男子（N=108）	女子（N=75）	男子（N=57）	女子（N=37）
Mean	33.50	36.31	33.68	35.84
SD	4.70	4.84	4.06	4.71

3）「自己の性及び性別規範に対する受容性」についての自由記述の回答結果

自己の性及び性別規範に対して懐疑的・否定的な認知をもつ者と受容的・肯定的な認知をもつ者との割合は、Figure 2 にみられるように、「懐疑・否定的認知」と「受容・肯定的認知」にほぼ 2 分されている。性差については、男子に「受容・肯定的認知」が有意に多い（χ^2= 20.186, df = 2, p<0.001）。

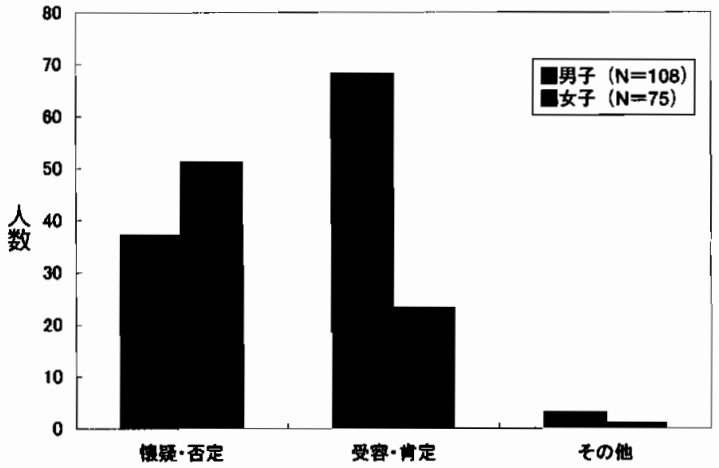

Figure2　Pre・testにおける性及び性別規範の受容性の分類

（2）講義前後における本受講者のジェンダー認知の変化

講義前後において、受講者のジェンダー認知が変化したか否かを「日本版BSRI」と「SESRA-S及びSARLM」についてみる。

1）「日本版BSRI」における講義前後の変化

「日本版BSRI」において、講義前（プリ・テスト）の 4 型の各人数が、講義後（ポスト・テスト）に変化したか否かをみる。ポスト・テストにおける 4 型の分類に際しては、プリ・テストの分類基準をそのまま使用した。即ち、プリ・テストにおいて設定された「男性性」得点、「女性性」得点の各中央値に基づいて、受講者それぞれのポスト・テストの「男性性」得点と「女性性」得点から、「男性性m」「女性性f」「両性性mf」「両貧性u」の 4 型に分類した。その理由は、プリ・テスト、ポスト・テスト毎に独立して、「男性性」得点、「女性性」得点の中央値によって分類した場合、プリ・テストとポスト・テストでの中央値の値が異なる、つまり、分類基準が異なる可能性が生じ、分類自体が相対的になるのを避けるためである。

結果は、Table5に示したようになった。Table5にみられるように、プリ・テストからポスト・テストにかけて変化した者の数は極めて少なく、ほとんど変化していないといえる。

Table5　BSRIにおけるPre・test－Post・testへの人数変化　(%)

		Post・test				
Pre・test		両性性	男性性	女性性	両貧性	(計)
両性性	男子	23 (71.9)	1 (3.1)	6 (18.8)	2 (6.3)	32
	女子	16 (84.2)	1 (5.3)	1 (5.3)	1 (5.3)	19
男性性	男子	4 (16.0)	17 (68.0)	0.0	4 (16.0)	25
	女子	1 (7.1)	12 (85.7)	0.0	1 (7.1)	14
女性性	男子	2 (10.0)	0.0	13 (65.0)	5 (25.0)	20
	女子	1 (5.0)	0.0	17 (85.0)	2 (10.0)	20
両貧性	男子	2 (6.5)	4 (12.9)	3 (9.7)	22 (71.0)	31
	女子	3 (13.6)	2 (9.1)	5 (22.7)	12 (54.5)	22
(計)		52	37	45	49	

2)「SESRA-S及びSARLM」における講義前後の変化

SESRA-S及びSARLMにおける講義前後の受講者の平均得点の変化を示したのがTable 6, Table7及びFigure3, Figure 4である。

Table6　SESRA-SにおけるPre・test－Post・testの変化

SESRA-S	Pre・test		Post・test	
	Mean	SD	Mean	SD
男子 (N=108)	72.65	10.54	72.17	11.03
女子 (N=75)	78.76	9.40	79.84	11.23

Table7　SARLMにおけるPre・test－Post・testの変化

SARLM	Pre・test		Post・test	
	Mean	SD	Mean	SD
男子 (N=108)	33.50	4.70	33.41	4.60
女子 (N=75)	36.31	4.84	36.28	4.30

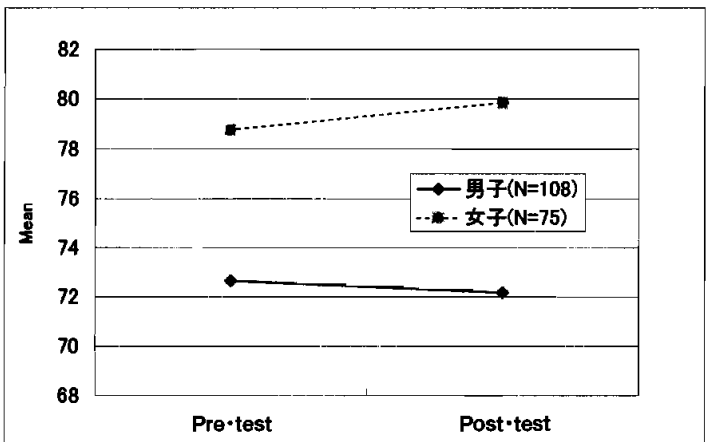

Figure3　SESRA-SのPre・test－Post・testの変化

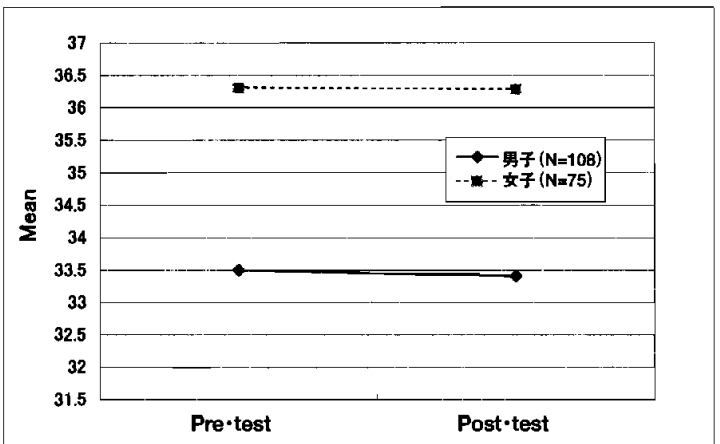

Figure4　SARLMにおけるPre・test－Post・testの変化

これらの図、表に見られるように、講義前後における得点の変化はほとんどみられない。プリ・テストと同様、ポスト・テストにおいても女子の平等主義的態度が高いという性差が認められる程度である(SESRA-S：F=21.026, df(1,181), p<0.001, 及びSARLM：F=18.089, df(1,181), p<0.001)。

3)「自己の性及び性別規範の受容性」に対する自由記述における講義前後の回答変化

自己の性及び性別規範の受容性に対する自由記述の回答からみた講義前後の変化については、Table8及びFigure5に示したような結果となった。Table8に見られるように、プリ・テストからポスト・テストにかけて自己の性別や性別規範に対する態度を変化させた者は余り多くない。プリ・テストで「懐疑的・否定的認知」をしていたのは88名だったのが、ポスト・テストでは83名と僅かだが減っている。同じく「受容的・肯定的認知」においても、プリ・テストで91名だったのが、ポスト・テストでは84名に減っている。結局「その他」が増えたという結果になっている。同じくFigure5から、プリ・テストとポスト・テストの一貫性をみると、一貫して「懐疑的・否定的認知」を行っている者が58名、一貫して「受容的・肯定的認知」を行っている者が60名とほぼ同数であり、自由記述による性及び性別規範に対する受容性においても講義の効果を示すような結果は得られていない。

Table8 「自己の性及び性別規範の受容性」におけるPre・test－Post・testへの人数変化

	Post・test			
Pre・test	懐疑・否定的認知	受容・肯定的認知	その他	計
懐疑・否定的認知	58	21	9	88
受容・肯定的認知	24	60	7	91
その他	1	3	0	4
計	83	84	16	183

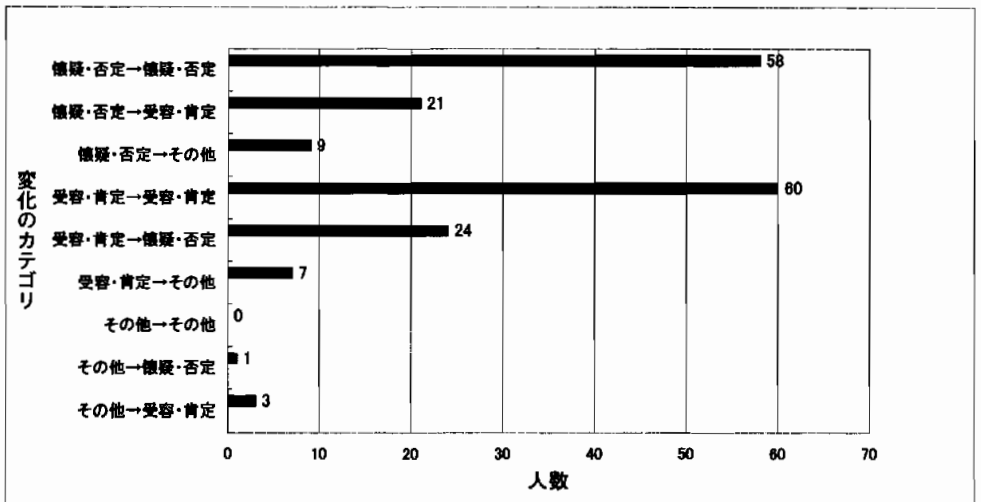

Figure5　自己の性及び性別規範の受容性におけるPre・test－Post・testへの人数変化

Ⅱ.「自己の性及び性別社会規範の受容性の有無」を基準とした群分けからみたジェンダー認知の変化

これまでの分析においては、期待した授業効果はほとんど得られなかった。そこで今度は、「自己の性及び既存の性別規範を肯定し、受容しているか否か」についての質問に対する回答結果を基準とした分析を試みる。この分析の意図は、何らかの授業効果が得られるかをみると同時に、ジェンダー認知を把握する指標として「性・性別規範の受容性」が有効かをも併せて吟味することにある。

分析の仕方は、対象者の自由記述の回答をもとに、受講者を２つの群に分ける(無回答などその他の回答は除く)。即ち、プリ・テストからポスト・テストにかけて一貫して懐疑的、否定的な回答を行っている者とプリ・テストでは肯定的、受容的であったが、ポスト・テストで懐疑的、否定的な回答に変化している者を「懐疑・否定的認知への変化群」とする。他方、プリ・テストからポスト・テストにかけて一貫して肯定的、受容的な回答を行っている者とプリ・テストでは懐疑的、否定的であったが、ポスト・テストでは肯定的、受容的な回答に変化している者を「受容・肯定的認知への変化群」とする。この２群間で「日本版BSRI」と「SESRA-S及びSARLM」における講義前後の結果をみる。

（１）自己の性及び性別規範に対する「受容・肯定群」と「懐疑・否定群」の人数

プリ・テストからポスト・テストにかけて変化した人数を示したTable8 及び Figure5をみると、「懐疑・否定への変化群」82名、「受容・肯定への変化群」81名となっている。以下、この

2群について、「日本版BSRI」のプリ・テストとポスト・テストの結果、次いで、「SESRA-S及びSARLM 」のプリ・テストとポスト・テストの結果をみる。

（2）自己の性及び性別規範に対する「懐疑・否定変化群」と「受容・肯定変化群」における「日本版BSRI」のプリ・テストとポスト・テストの結果

「懐疑・否定変化群」と「受容・肯定変化群」における「日本版BSRI」のプリ・テストからポスト・テストへの変化をみる。

まず、プリ・テストにおける「懐疑・否定変化群」と「受容・肯定変化群」における「日本版BSRI」の4タイプの人数をみる(Table9)。次いで、ポスト・テストについてみる（Table10)。Table9, Table10より次のことがいえる。即ち、「懐疑・否定変化群」はプリ・テストにおいては、「両貧性」27名、「両性性」22名となっていて「両貧性」が若干多いが、ポスト・テストでは極めて僅かだが、「両性性」25名、「両貧性」24名と逆転しているのが窺われる。一方、「受容・肯定変化群」についてみると、プリ・テストにおいては、「両貧性」19名、「女性性」17名、「男性性」18名に対して、「両性性」が27名と若干多い。ポスト・テストになると、「両性性」25名に対して「女性性」21名,「男性性」18名,「両貧性」17名と「女性性」が微増している。

結局、「日本版BSRI」のプリ・テストとポスト・テストにおける4タイプの人数変化について、特に「両性性」の人数の変化をみると、「懐疑・否定変化群」では22名から25名と微増しているのに対し、「受容・肯定変化群」では27名から25名へと微減しているのが窺われる。

Table9 「懐疑・否定的認知群」と「受容・肯定的認知群」におけるBSRIのPre・testの人数 (%)

	Pre・test				
変化の方向	両性性	男性性	女性性	両貧性	(計)
懐疑・否定への変化群	22 (26.8)	18 (22.0)	15 (18.3)	27 (32.9)	82
受容・肯定への変化群	27 (33.3)	18 (22.0)	17 (21,0)	19 (23.5)	81
(計)	49 (30.1)	36 (22.1)	32 (19.6)	46 (28.2)	

Table10 「懐疑・否定的認知群」と「受容・肯定的認知群」におけるBSRIのPost・testの人数 (%)

	Post・test				
変化の方向	両性性	男性性	女性性	両貧性	(計)
懐疑・否定への変化群	25 (30.5)	17 (20.7)	16 (19.5)	24 (29.3)	82
受容・肯定への変化群	25 (30.9)	18 (22.2)	21 (25.9)	17 (21.0)	81
(計)	50 (30.7)	35 (21.5)	37 (22.7)	41 (25.2)	

（3）自己の性及び性別規範に対する「懐疑・否定変化群」と「受容・肯定変化群」における「SESRA-S及びSARLM」 のプリ・テストからポスト・テストへの得点変化

自己の性及び性別規範に対する「懐疑・否定変化群」と「受容・肯定変化群」における「SESRA-S及びSARLM」のプリ・テストとポスト・テストの得点を示したのが Table11, Table12,

図示したものが Figure6, Figure7 である。これらの図、表より次のことが指摘できる。

即ち、「SESRA-S」については、「懐疑・否定変化群」におけるプリ・テストとポスト・テストの得点にほとんど差はない。一方、「受容・肯定変化群」におけるプリ・テストとポスト・テストの得点は、有意差はないものの、プリ・テストからポスト・テストにかけて僅かだが得点が増加している。

また、「SARLM」についてみると、「懐疑・否定変化群」におけるプリ・テストとポスト・テストの得点にほとんど差はないが、微減している。他方、「受容・肯定変化群」におけるプリ・テストとポスト・テストの得点には、ほとんど変化がみられない。

これらの結果より、「懐疑・否定変化群」と「受容・肯定変化群」別にみた「SESRA-S及びSARLM」のプリ・テストとポスト・テストの得点変化について、講義の効果はほとんど認められなかったということになる。

Table11 「懐疑・否定群」と「受容・肯定群」におけるSESRA-Sの Pre・test－Post・testの得点変化

SESRA-S		Pre・test	Post・test	Pre－Post・test
懐疑・否定群（N=82）	Mean	76.59	76.71	0.12
	(SD)	10.87	12.64	10.35
受容・肯定群（N=81）	Mean	74.17	75.14	0.96
	(SD)	9.96	10.95	6.72

Table12 「懐疑・否定群」と「受容・肯定群」におけるSARLMのPre・test－Post・testの得点変化

SARLM		Pre・test	Post・test	Pre－Post・test
懐疑・否定群（N=82）	Mean	35.45	35.22	－0.23
	(SD)	5.20	4.92	3.51
受容・肯定群（N=81）	Mean	33.94	34.10	0.16
	(SD)	4.67	4.50	4.12

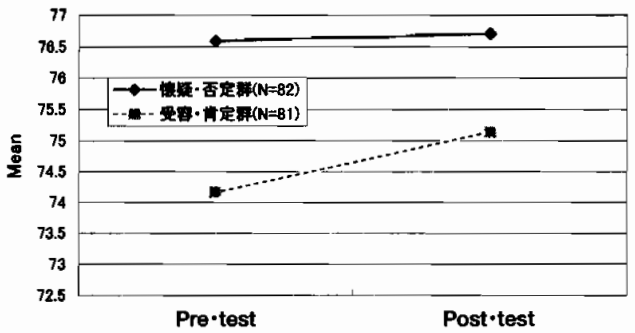

Figure6 懐疑・否定群と受容・肯定群におけるSESRA-Sの Pre・test－Post・testの得点変化

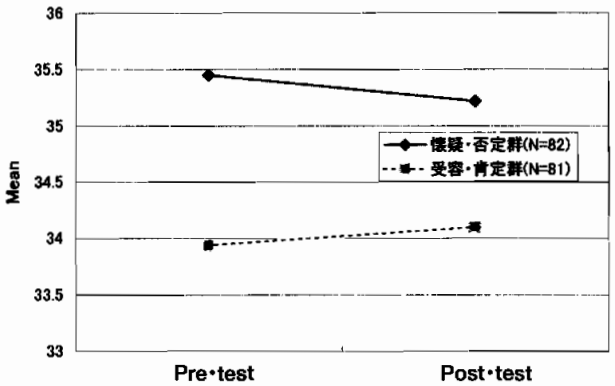

Figure7　懐疑・否定群と受容・肯定群における
Pre・test－Post・testの得点変化

Ⅲ．追跡面接調査の結果－ ケース・スタディ －

『ジェンダー論』講義を通して、受講者のジェンダーに対する認知の変化を期待した効果は、2つの代表的な量的尺度及び自由記述的方法いずれの分析においても、変化はほとんど得られないという結果であった。結局、量的分析による講義の効果ははかばかしいものではなかった

Table13　面接参加者の特性

	性別	BSRI型		SESRA-S		SARLM		自己の性及び性別規範の受容性認知型		
No.		(Pre・test)	(Post・test)	(Pre・test)	(Post・test)	(Pre・test)	(Post・test)	(Pre・test)	(Post・test)	変化型
1	女	男性性	男性性	96	96	45	44	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
2	男	両貧性	両貧性	77	72	29	33	受容・肯定	受容・肯定	受容・肯定
3	男	男性性	男性性	63	65	30	33	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
4	女	両性性	両性性	90	86	37	39	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
5	女	男性性	男性性	89	87	42	37	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
6	女	男性性	男性性	91	94	41	42	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
7	男	両性性	両性性	83	79	37	35	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
8	女	両性性	両性性	76	78	42	40	受容・肯定	受容・肯定	受容・肯定
9	女	両貧性	両貧性	79	80	39	38	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
10	女	両貧性	両貧性	81	84	41	35	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
11	女	両性性	両性性	72	78	28	35	懐疑・否定	受容・肯定	受容・肯定
12	男	両性性	両性性	67	64	34	28	受容・肯定	受容・肯定	受容・肯定
13	女	両貧性	両貧性	83	74	37	35	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
14	男	男性性	男性性	88	92	36	34	懐疑・否定	受容・肯定	受容・肯定
15	男	男性性	男性性	87	89	43	43	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
16	男	男性性	男性性	74	72	35	33	受容・肯定	受容・肯定	受容・肯定
17	男	両性性	両性性	59	55	34	25	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
18	男	男性性	男性性	68	62	31	32	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定
19	女	女性性	女性性	81	84	37	43	受容・肯定	受容・肯定	受容・肯定
20	女	両貧性	両貧性	83	89	33	36	懐疑・否定	懐疑・否定	懐疑・否定

ということになる。そこで、量的にではなく、個々人に焦点を当て、講義終了後に、あらためて受講者の中から任意に依頼し、快諾を得た学生に対して行った面接結果の分析から、授業の効果がみられたかどうかを探索的に検討してみる。

Table13に掲げた面接参加者20名の中から、進歩的、革新的なジェンダー認知をもっていると推察される者、既存のジェンダー観を保持していると見られる者を男女それぞれ1名ずつ抽出し、かれらのジェンダー認知の様相を描き、何らかの授業効果が推察されるかを探ってみる。

面接内容は『大学生の生活と意見についての調査』というかたちで、以下の4点を中心に、「半構造化面接」方法によって行ったが、できる限り面接参加者本人に自発的に語ってもらうことを重視した。従って、次に記した質問順序も本人の話の文脈に沿って随時入れ代えた。①本人の自己認識（将来の展望、職業観、結婚や家族観、自尊感情・自己評価）②家族について（家族構成と同居の状況、家族メンバーの教育歴・職歴、家族間の人間関係、親の性格・考え方、こどもへの接し方（特に性別躾の状況））、③学校生活について（共学か別学か、教師や同級生との交流の様子（特に性別処遇の見聞と体験））、④本人のジェンダー観（自分の男女観とそれに影響を与えた出来事や環境の想起）

本稿においては、上記4点の内の、④に特に焦点を当てて、面接内容を概略して記す。その際、面接参加者に公表の了解は得ているが、重大な個人情報に関わる部分については極力配慮し、筆者の判断で多少の修正を加えたことを断っておきたい。

（1）従来のジェンダー規範に対して肯定的、受容的な認知をもっているケース

【事例A】この男子学生においては、「自己の性及び性別規範に対する受容性」については、プリ・テスト、ポスト・テストいずれにおいても「受容・肯定的な認知」をしており、変化は見られない。「日本版BSRI」の型は、プリ－ポスト・テストいずれにおいても「両貫性」即ち、「男性的特性」「女性的特性」ともに低いタイプである。「SESRA-S」についてみると、プリ・テストでは77点と当初より余り高くなく、ポスト・テストでも72点へと若干下がっている。「SARLM」についても、プリ・テストが29点、ポスト・テストが33点とこれも特に高くはなく、平等主義的な態度は余り高くない。これらの結果からは、本学生に『ジェンダー論』講義の効果があったとはいえない。このような結果は、面接での本学生の回答内容、特に家族に対する見方や家族観によく示されている。本学生は両親と姉と妹の3人兄弟だが、現在はひとりで下宿生活をしている。父親は、体育会系で、優しいが、礼儀に厳しく、正義感、責任感が強い。母親は、過去にパート勤めを経験しているが、現在は専業主婦である。躾については厳しく、物事をきちんとてきぱきこなす積極的な性格である。家庭環境や両親の躾についての回想では、本人に対する両親からの特別な躾や性別処遇の思い出はないが、姉妹、特に妹に対して「女だから」「女なのに」という性別躾がやや強かったことを覚えている。妹は何かにつけて姉と比較されるのが不満であった。本人自身は姉妹と比較されても、性別が違うので特に不満には感じなかった。学校生活は男女共学だったが、授業での質問への生徒の答え方に対する男

性教師の反応が、男子には厳しく、女子、特にかわいい生徒には甘かったことが印象に残っている。将来は専門職に就き、家族を大切にしたいと語っている。その中で、夫婦のあり方については、一心同体意識と相互独立的意識との間で揺れている。

過去の回想及び現在の自覚、将来の展望において、本人自身には男女の区別や差別意識は余りなく、かつ、家族や学校生活での見聞で、女性が差別されていることは認識できていても、そのことが自己認知や自身の考え方にはほとんど影響しておらず、自分自身が男性であることについては終始肯定的で受容観が強い。結局、本学生は、男性としての自己に満足しており、ジェンダー差別についてのある程度の知識はもっていても、それがジェンダー・センシティビティにまで高まっていないケースと推察される。

【事例B】このケースは女子学生のものだが、「自己の性及び性別規範に対する受容性」については、プリ・テスト、ポスト・テスト一貫して「受容・肯定的な認知」をしている。「日本版BSRI」のタイプについては、プリ－ポスト・テストいずれにおいても「女性性」に属する。「SESRA-S」についてみると、プリ・テストでは81点とやや高く、ポスト・テストでも84点へと微増している。「SARLM」についても、プリ・テストが37点、ポスト・テストが43点と高い。平等主義的な態度については高いほうの得点をとっているにもかかわらず、本学生に『ジェンダー論』講義前後の変化はほとんど認められず、授業効果が期待できなかったケースである。

面接での回答内容をみると、本学生は両親と妹の４人家族で、自宅生である。父親は会社を経営しており、母親は父親の両親（別居）と共に会社の事務関係の仕事を手伝っている。父親は亭主関白の典型で、母親は結婚を機に家庭に入り、本人が高校入学時に、父の会社を手伝始め、現在は家事と仕事を両立している。本人によれば両親仲はよくない。躾、特に性別躾については、父親は区別するほうで、母親は全く区別しなかったと回想している。祖父母も孫である当人に性別を意識した言動を行っている。本学生はこのような家庭環境や両親の躾の影響を強く感じており、『やはり男が上』という意識を多々有している。一貫して男女共学であった学校生活においても多くの男女差別を見聞している。総じて学校や教師は、男子の指導には熱心で厳しく、女子には甘かったことを覚えているが、学校生活からの影響はそれほど強くは感じていない。将来は常勤職に就くが、結婚を機に専業主婦になることを希望している。だが、結婚生活については、夫婦の一体感や子供重視の家族観や結束観を強く期待しているわけではなく、「私は私」という自分中心の考え方を多々もっている。

本人のジェンダー観は『男は上で偉いが、就職など社会的に大変で逃げられない。女は下だが、生きやすく、得。楽だし甘えられる、結婚に逃げられる』に尽き、典型的な性別規範の持ち主ということができる。家庭環境、学校生活いずれにおいても、性別による異なる処遇を経験していることが、このようなジェンダー観につながっていることが看取される。過去及び現在まで、男女の区別や差別についての経験や知識が多々あるにもかかわらず、そのことがジェンダー・センシティビティを高めることにはほとんどつながっておらず、従前の性別規範に安住し、むしろそれを逆手にとった感さえ窺われる自己認知や男女観を有している。性別規範を

利用する要領のよささえ感じさせる。『ジェンダー論』講義が全く効果を持たなかったケースといわざるをない。

（2）従来のジェンダー規範に対して懐疑的、否定的な認知をもっているケース

【事例C】男子学生についてのケースである。まず、「自己の性及び性別規範に対する受容性」については、プリ・テスト、ポスト・テストいずれにおいても「懐疑・否定的な認知」をしている。「日本版BSRI」の型は、プリ－ポスト・テストいずれにおいても「両性性」即ち、「男性的特性」「女性的特性」ともに高いタイプに属する。「SESRA-S」についてみると、プリ・テストでは83点と当初よりやや高く、ポスト・テストでは79点へと微減しているが低くはない。SARLMについても、プリ・テストが37点、ポスト・テストが35点とやや高く、平等主義的な態度は高いほうに入る。これらの結果から、本学生は当初より男女の区別をしないパーソナリティを有し、平等主義的な態度をもっているといえる。

面接での回答内容から本学生の特徴を探ってみる。本学生は、両親と弟２人の５人家族で自宅生である。母親はずっと専業主婦であったが、５、６年前にパートを始めている。両親共に共同で家事分担する姿をよく見てきた。本人からみて父親はすぐキレルが男らしく、母親は世話焼きで料理がうまく、共に理想の男性、女性像だという。特に印象に残るような性別躾の経験はなく、両親とも長男である本学生に、跡取りとか老後の同居や世話を期待していない。むしろ本人のほうがそれを先取りして気遣っている。学校生活は男女共学だったが、教師の態度が男子には厳しく女子に甘いこと、女子がリーダー・シップをとることに否定的な男子生徒がいたことが印象に残っている。将来は、専門職に就きたいと希望しているが、家族についての強い思い入れや絆意識は余り見られない。過去の回想及び現在の自覚、将来の展望において、本人のジェンダー観に特記すべきバイアスはない。性別や規範を強く意識したような家庭環境や学校生活での経験や見聞も見あたらない。これらのことから、当学生は、講義前から、既に平等主義的、進歩的な男女観をもっていたと推察できる。その傾向が講義後にもそのまま維持されている。態度変化を生じさせることを目的とするという意味では、さらなる授業効果はみられなかったということになるが、本学生は既に本授業の目的を達成している者とみることもできる。

【事例D】女子学生のケースであるが、「自己の性及び性別規範に対する受容性」については、プリ・テスト、ポスト・テストいずれにおいても「懐疑・否定的な認知」をしている。「日本版BSRI」の型は、プリ－ポスト・テストいずれにおいても「両性性」即ち、「男性的特性」「女性的特性」ともに高いタイプに属する。「SESRA-S」についてみると、プリ・テストでは90点、ポスト・テストでは86点へと微減しているが、いずれでもかなり高い。「SARLM」についても、プリ・テストが37点、ポスト・テストが39点と高く、平等主義的な態度はかなり高いといえる。これらの結果から、本学生は当初より男女の区別をしないパーソナリティを有し、平等主義的

態度をもっているといえる。

面接での回答内容から本学生の特徴をみてみる。本学生は、両親と兄と弟の3人きょうだいで、兄と本人がそれぞれ下宿生活をしている。父親は会社役員で、母親は兄の出産時以来、専業主婦になっており、家事のほとんどを担っている。両親仲は比較的よく、父親は優しいが頑固で趣味人で、仕事人間だったが、最近は子供に関わるようになった。母親は家事が上手く、女らしい。ややうるさいが、理想の女性像ではある。本人にのみ向けられた「女だから手伝え」といった性別躾の傾向を両親いずれにも感じており、それに反発してきた。また、男兄弟の影響で自分が男っぽいと感じており、本人は、きょうだいの性別の組み合わせが自己のジェンダー観に影響していると認識している。男女共学だった学校生活については、男女別の扱いは小、中、高校いずれでもあったが、高校で男性教師が女子の成績に甘いのを見聞している。本人にとっては、小学校で、「相撲」に勝つと男性教師から「女のくせに力が強い」と皮肉られて気分悪かったのをよく覚えている。将来は常勤の専門職を希望しており、家族をもつことの期待も大きいが、両立志向が強く、夫とは自立的な関係を望んでいる。過去の回想及び現在の自覚、将来の展望いずれにおいても、本人のジェンダー観は男女平等志向が高い。従来の性別規範に対する懐疑的、批判的な認知が顕著であり、ジェンダー・センシティビティはかなり高いということができるだろう。このような認知は、当人が述懐しているように、家庭環境、特に男兄弟との相互作用、それを補強する両親からの性別処遇の経験、さらには、学校生活における教師からの本人に対する差別的な発言などによって、ジェンダー・センシティビティが高められた結果と解せるのではないか。

以上にみたように、当学生は、講義前から既に平等主義的、進歩的な男女観をもっていたと推察できるが、その傾向が講義後にもそのまま維持されている。先の【事例C】同様、態度変化を生じさせることを目的とするという意味では、さらなる授業効果はみられなかったケースではあるが、本学生は本講義が目指している姿を具現しているケースの一つといえよう。

考察

本研究は、本学学生を対象とした授業実践を行うこと、具体的には、筆者担当の『ジェンダー論』講義の受講者を対象に、授業前と授業後において学生にジェンダーに対する認知的変化が生起した否かを検討することであった。その結果、2つの代表的な量的尺度及び自由記述的方法いずれの分析においても、変化はほとんど得られなかった。続いてなされた、面接調査による個別ケースの探索的な検討においても、授業の効果と見なしうるような結果は余り得られなかった。結論としては、本研究の目指していた「ジェンダーに関する知識を得ることを通して、ジェンダーに対する感受性をもつようになる」という目的はうまく果たされなかったといわざるを得ない。このような結果について、考えうる解釈を試み、いくつかの示唆を得たい。

（1）授業効果の測定の問題

今回の授業実践は、ジェンダーを扱う講義によって、学生のジェンダーに関する感受性を高め、かれら自身の自発的な認知変容を期待したものであった。だが、結果は期待に沿うようなものではなかった。このような結果になった理由の主なものとして、まず第一に、授業効果を測る測定具の問題があげられる。今回は、授業の効果を、ジェンダー認知を測定する既存の尺度を用いた。それに加えて、「自己の性及び既存の性別社会規範を受容するか否か」を尋ねる自由記述形式の質問を用いた。これらの測度あるいは指標の適切性、有効性を見るべく、データ分析も2つの観点から試みた。その結果、今回用いた3つ方法の中では、「自己の性及び既存の性別社会規範の受容性」を基準とする方法が、ほんの僅かではあるが、授業効果を窺わせるものであった。喫緊の課題としては、量的指標の有効性も続けて検討しつつ、自由記述形式で用いる質問内容をもっと吟味して洗練すべきことがあげられる。本研究のように、「男（女）としての人生はどうでしたか」「男（女）でなければよかったのにと思いますか」「今度生まれ変わるとしたら、男（女）に生まれたいと思いますか」といった過去・現在・将来における性別に基づいた自己認知や評価を問うのではなく、「ジェンダー規範」そのものをどう認識しているかを問うべきではないかということである。つまり、受容するにせよ、否定するにせよ「現存のジェンダー規範」を強く意識し、拘泥しているかどうか、あるいは、拘りがなく、どちらの性別かということよりも、大切なのは自分自身という意識や認識をもっているかどうかを導き出せるような質問を工夫すべきだということである。

しかし、もっと基本的な問題がある。それは、今回用いた方法のいずれもが、授業効果をジェンダー認知の変化というかたちで直接測ろうとするものであったことである。今回のような方法は、授業実践効果をみる方法としては、やや飛躍があったと思われる。授業の効果を測るには、講義前後のジェンダーに関する知識の量的、質的変化を見る、ジェンダーに関わる現象や問題に対する講義前後の感受性の変化を見る、といた複数のメジャーが並行して使用される必要があるのではないか。授業を受けない統制群を設け、それと比較することは最も基本的な手法である。授業の結果がそのまま直接的にジェンダー認知の変化に反映されると考えることは、やや性急かもしれない。その点で、今回は探索的な試みではあったが、方法的に十分ではなかったと思われる。方法的な吟味を続けながら、より洗練させることが今後の課題として残された。

（2）授業実践の実施年齢の問題

なぜ、授業の効果がうまく得られなかったのかについての、もう一つの理由は、授業実践を行う対象年齢の問題があると思われる。今回は大学生を実践の対象として選定したが、大学生という年齢段階では、既に遅いのではないかということである。

“性役割（sex-role）”の発達という概念で活発に論じられていた1970年代当時、多くの理論は、「性役割の発達は極めて早く、生後1歳で、既に男女の区別が原始的なレベルではあるが、知覚可能になる。その後、外面レベルでの発達は6歳前後、小学校入学時にはほぼできあがり、中学校入学時には、身体的な特徴を伴った性役割観が内面化され、確立される」と主張してい

た。このようなめざましい発達を支える環境として、性別規範とそれをこどもに伝える社会化の担い手である親や教師、同輩や友達などの働きかけが強調されていた（湯川,1983)。こうした論や主張に従えば、大学生段階では、既に男女観はできあがってしまっていることになる。

このような事実は、実は上に紹介したケースに窺うことができる。従来のジェンダー規範に対して懐疑的、否定的な認知をもっているケースとして【事例C】【事例D】を紹介した。しかし【事例C】【事例D】の学生は、授業によって、ジェンダー認知に新たな変化が生じたわけではなく、授業開始以前に既に現今のジェンダー規範に懐疑的で、批判的な認知をもっていたとみられるのである。授業実践を通してジェンダーに対する態度変化を生じさせることを狙った本研究の目的から見れば、【事例C】【事例D】は成功例ではない。むしろ、かれらは本講義が目指している姿を既に達成している学生ということができるだろう。

このような事実から得られる示唆は、ジェンダー認知の変容を意図した授業実践は、もっと早い年齢、少なくとも大学入学以前、既存の理論を参照するならば、小学校入学前後にまで時期を早めるべきということであろう。

（3）性差について

今回の結果では、「SESRA-S, SARLM」、即ち、平等主義的性役割態度尺度において、女子が男子より有意に得点が高いという差が見られた。このような結果は、従来、ジェンダー規範やステレオタイプに対する否定的な認知は青年女子に顕著であるという多くの研究知見と一致する（湯川,1983, 1995)。ちなみに、ジェンダーに関する諸問題の多くには、これまで明瞭な性差が必ずといってよいほど認められてきた。しかし、今回、このほかには目立った性差は見られなかったのは予想外であったが、このことは、ジェンダーの問題が、男女差別の当事者（被害者）である女子にとってのみでなく、男子にも共有されてきたことの証しであるかもしれない。引き続き、さまざまな観点からの吟味が必要であろう。

最後に、男女を区別し、序列化する現存の性別社会規範の成立は、少なくとも近代社会の成立と期を一にすると言われ、進化論によればその起源は、さらに人類の有史時代にまでに辿り着くとさえ言われる。それほどに長いスパンをもつとされるジェンダー規範に対する人々の無意識に近い信念、常識を変えるには、なお長い道のりと地道な努力が必要であることを改めて刻んでおきたい。

「付記」：本研究は、2004年度の本学「研究助成費」を得て実施された研究の報告である。調査の実施に協力してくれた本学『ジェンダー論』の受講者、及び、筆者の面接依頼に快く応じてくれた学生諸氏にたいし、記して謝意を表するものである。なお、本研究結果のデータ分析では、名古屋外国語大学・石田勢津子教授の協力を得た。厚く謝意を表する次第である。

文献

1）東清和・鈴木淳子 1991 性役割態度研究の展望　心理学研究, 62, 270-276.

2）Bem, S. L. 1974 The measurement of psychological androgyny. Journal of Consulting and Clinical Psychology, 42, 155-162.

3）Bem, S. L. 1975 Sex-role adaptability：One consequence of psychological androgyny. Journal of Personality and Social Psychology, 31, 634-643.

4）Bem, S. L. 1981 Gender schema theory: A cognitive account of sex typing. Psychological Review, 88, 354-364.

5）Bem, S. L. 1985 Androgyny and gender schema theory: A conceptual and empirical integration, In T.B. Sonderegger, (ed.), Nebraska symposium on motivation, Vol.32, University of Nebraska Press, 179-226..

6）井上輝子・江原由美子(編)　1991 女性のデータブック　有斐閣

7）井上輝子・江原由美子(編)　1999 女性のデータブック第3版　有斐閣

8）Katsurada, E., & Sugihara, Y. 1999 A preliminary validation of the Bem Sex Role Inventory in Japanese culture, Journal of Cross-Cultural Psychology, 30, 641- 645.

9）聖心女子大学ジェンダー教育研究会（代表：鶴田敦子・高橋恵子ら）2003　大学におけるジェンダー教育の可能性－2002年度　聖心女子大学学内共同研究　研究報告書－.

10）下仲順子・中里克治・河合千恵子 1990　老年期における性役割と心理的適応, 社会老年学, 31, 3-11.

11）下仲順子・中里克治・本間 昭 1991　長寿にかかわる人格特徴とその適応との関係 －東京在住100歳老人を中心として－, 発達心理学研究, 1, 136-147.

12）Sugihara, Y., & Katsurada, E. 1999 Masculinity and femininity in Japanese culture: A pilot study, Sex Roles, 40, 635-646.

13）Sugihara, Y., & Katsurada, E. 2000 Gender-role personality traits in Japanese culture, Psychology of Women Quarterly, 24, 309-318.

14）鈴木淳子 1987 フェミニズム・スケールの作成と信頼性・妥当性の検討, 社会心理学研究, 2, 45-54.

15）鈴木淳子 1994a 脱男性役割態度スケール（SARLM）の作成, 心理学研究, 64, 451-459.

16）鈴木淳子 1994b 平等主義的性役割態度スケール短縮版（SESRA-S）の作成, 心理学研究, 65, 34-41.

17）湯川隆子 1983 性役割　三宅和夫他（編）波多野- 依田児童心理学ハンドブック, 金子書房, 251-263.

18）湯川隆子 1995 性差の研究　柏木恵子・高橋恵子(編著)　発達心理学とフェミニズム, ミネルバ書房, 116-140.

19）湯川隆子・廣岡秀一 2003 大学生におけるジェンダー特性語の認知(2) －性分類反応からみた1970年代と1990年代の比較 －. 三重大学教育学部研究紀要（人文・社会科学）, 54, 117-123.

20）湯川隆子・石田勢津子 2004　ジェンダー認知の把握（測定）における妥当性の検討－大学生における自己の性別認知との関連から－, 日本教育心理学会第48回総会発表論文集,476.

21）湯川隆子・石田勢津子 2005　ジェンダー認知の変容とその測定方法の検討, 奈良大学紀要, vol.33, 81-93.